

## 中国の巡礼

中国の寺院では、「朝山進香」と書かれた頭陀袋を首にぶらさげた巡礼者に出会うことがあります。朝山とは、お寺にお参りするという意味です。進香とは、仏さまの前に進んで香をささげることです。本堂の床には「パンティオン」とよぶ礼拝用の低い台が置かれています。信者さんたちはこの台の前に立って合掌し、次に腰をかがめ、額を台につけて深々と礼拝します。そして、ご本尊さまの前に進み出て長い線香を香炉に立てます。

仏さまの周囲をお参りするときは必ず右回りです。これを「右遶」といいます。清らかな右手を常に仏さまに見せる状態で、周囲をまわりますから右回りになるわけです。袈裟をつけるときも、左肩を覆って右肩をあらわにして、清浄なる右肩を仏さまに示して仁義を切ります。

中国ではほとんどの仏教寺院が禅宗と浄土宗をまじえて修行がなされています。つまり、一寺院内で坐禅と念仏を取り入れた「禅浄双修」の日課が組まれています。このように、中国の仏教寺院は、朝は浄土系の法式によって行なわれ、夕刻は懺悔文や呪を読み、さらに施餓鬼を行ないます。そして夜は坐禅をしてから就寝になります。

弘法大師は 31 歳のときに、遣唐使として中国大陸 2,400 キロを 50 日間で踏破されました。現在、そのコースを巡礼することができます。それは、昭和 59 年に高野山から「空海・長安への道」が派遣され、私たち僧五名が弘法大師入唐の追体験をしたことが始まりです。その後、この全コースは高野山の静慈園先生の尽力によって 21 ヶ寺が選ばれ、「南方」「運河」「古都」の三区間に分けられ、一コースを 10 日ほどで巡礼することができるようになりました。金龍寺でもときどきツアーを計画して、弘法大師が歩かれた風景を多くの人たちに追体験していただいています。